

# 久留米大学人間健康学部学生の入学動機と学びの実感からみる 「文医融合」教育の課題

行實 鉄平<sup>1)</sup>・浦上 萌<sup>2)</sup>

本研究では、久留米大学人間健康学部の学生（1～4期生）を対象とした入学動機と学びの実感に関する調査データを用い、1～4期生における入学動機の差異を把握するとともに、1期生の学びの実感の変遷（4年間）を明らかにすることで、当該学部が目指す「文医融合」教育の課題を検討することを目的とした。その結果、1～4期生の入学動機は、各期において特異な入学動機要素（1期生「無目的」要素、2期生「大学の独自性」要素、3期生と4期生「偏差値との適合」要素）が確認できた一方で、1～4期生に共通した入学動機要素（「資格取得」要素）も存在することが明らかとなった。また、1期生の学びの実感（22項目）の変遷は、1～3学年と年次が上がるにつれて多くの項目で実感が低くなる傾向がみられたが、4年次に関しては、多くの項目で高まる傾向が明らかとなった。さらに、当該学部が目指す「文医融合」教育の課題としては、単なる資格教育に留まることなく、多様な学習機会（大学内外の教育活動）を通じた教員と学生との関係性の構築が必要であることが示唆された。

キーワード：1期生、入学動機、学びの実感、「文医融合」教育

## Issues of “education that integrates humanities and medicine” seen from the motivation for admission and the actual feeling of learning in new undergraduate students

Tepei YUKIZANE and Moe URAGAMI

### 1. 背景

2017年度にスタートした久留米大学人間健康学部（総合子ども学科、スポーツ医科学科）は、2020年度に完成年度を迎える。当該学部は、「文医融合」を学部コンセプトとして掲げ、文系学部でありながら医学部との連携・協働による独自のカリキュラムを設定し、学生に幅広い知識と技術を学修してもらえらる環境を提供することで、保育や体育・スポーツ分野における専門性の高い人材育成を目指している。

これまで当該学部では、2017年度に「人間健康学部における初年次教育プログラムの開発」（人間健康学部中央研究費）および「総合子ども学科とスポーツ医科学科との連携における学生の育成」（人間健康学部中央研究費）といった2つの学部内プロジェクトが創設され、それが契機となり、

1) 久留米大学

2) 椛山女学園大学

2018年度「新学部における教育評価システムの構築～『文医融合』の学習環境の実質化に向けて～」(副学長裁量研究教育支援費)、2019年度「人間健康学部における教育評価システムの確立」(副学長裁量研究教育支援費)、そして本年度「人間健康学部における教育評価および新規科目の開発」(副学長裁量研究教育支援費)といった、いわゆる、「学部教育研究プロジェクト」(以下、「学部PJ」とする)が学部開設初年度より4年間継続して展開されてきた。

この学部PJの成果は、学部FD (Faculty Development) の教材提供をはじめ、学部紀要への論文投稿、新規授業科目の開発、初年次教育ハンドブック(テキスト)の発行など、多岐に渡る。その中で、本研究に関連する「学生の入学動機と学びの実感」に関する研究は、以下のような研究がこれまで蓄積されてきた。

第一に、浦上ら(2019)による研究では、1期生を対象に新学部独自の入学動機要素を測定・分析した結果、4つの因子要素(①内的期待、②外的期待、③資格・専門性、④無目的)が抽出され、その後のクラスター分析において明確な入学動機を持つ学生とそうでない学生とが双方に存在することが明らかにされた。また、今後の課題としては、大学生活の中でどのように目的意識が変化していくのか追跡調査を行うとともに、新しく入学する学生との特徴を比較・検討する必要性が示された。

第二に、行實ら(2019)による研究では、1期生の入学動機をベースとした期待と学びの実感のギャップをIPA (Importance-Performance Analysis) 分析により確認した結果、期待が高い一方で実感が低い項目、いうなれば、不満足空間にプロット(位置づけ)された2項目(①文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている、②自分の才能を伸ばすことができる)が抽出され、その内容から、医学的知識に裏付けされた専門教育の実質化が今後の課題として示唆された。

最後に、行實ら(2020)による研究では、入学動機と学びの実感を1期生と2期生との間で比較・分析した結果、2期生は、1期生に比べて明確な入学動機を持っている学生が多い傾向であることが明らかとなり、その後のIPA分析から、学部全体で取り組むべき3つの課題(①「文医融合」教育を感じる多くの機会の設定、②両学科の学生が共に交流できる学部共通科目の開発、③医学的知識を持った保育士養成プログラムの魅力を伝えていく努力)が提示された。

このような研究結果から「学生の入学動機と学びの実感」は、常に変化するものであり、過去の調査結果と比較しながら継続的・動的に捉えていくことが肝要である。また、当該学部は、2020年度に完成年度を迎えることから、特に1期生の学びの実感の変遷(4年間)を捉えることは、新たなカリキュラムを検討する上でも必要不可欠な取り組みであるといえよう。

## 2. 目的

本研究では、久留米大学人間健康学部の学生(1～4期生)を対象とした入学動機と学びの実感に関する調査データを用い、1～4期生における入学動機の差異を把握するとともに、1期生の学びの実感の変遷(4年間)を明らかにすることで、当該学部が目指す「文医融合」教育の課題を析出することを目的とした。

### 3. 方法

#### 1) 対象

本研究において調査対象となる久留米大学人間健康学部の学生は、入学動機および学びの実感に関する調査に回答した学生509名とした。具体的には、1期生140名（総合子ども学科：54名、スポーツ医科学科：86名）、2期生139名（総合子ども学科：55名、スポーツ医科学科：84名）、3期生125名（総合子ども学科：47名、スポーツ医科学科：78名）、4期生105名（総合子ども学科：40名、スポーツ医科学科：65名）であった。

#### 2) 調査の方法

表1は、調査対象者の入学期、学科、性別、調査時期について示したものである。2017～2019年度は対面の授業、2020年度はweb（google フォーム）を使用したアンケート調査（無記名方式）を実施した<sup>註1</sup>。その際、アンケート回答前に筆者らによる調査の趣旨、プライバシーの保護とデータの保管方法、自由参加で不利益防止等に関する倫理的配慮の説明を行った。なお、本研究は、本学倫理委員会による審査を受け、承認を得た上で調査を実施している。

表1 調査対象プロフィール

項目	1期生（調査時期：2017年7月）						2期生（調査時期：2018年7月）					
	学部全体		子ども学科		スポーツ学科		学部全体		子ども学科		スポーツ学科	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
男	71	50.7	16	29.6	55	64.0	71	52.2	15	27.3	56	69.1
女	69	49.3	38	70.4	31	36.0	65	47.8	40	72.7	25	30.9
合計	140	100.0	54	100.0	86	100.0	136	100.0	55	100.0	81	100.0
項目	3期生（調査時期：2019年7月）						4期生（調査時期：2020年7月）					
	学部全体		子ども学科		スポーツ学科		学部全体		子ども学科		スポーツ学科	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
男	63	50.4	8	17.0	55	70.5	58	55.2	13	32.5	45	69.2
女	62	49.6	39	83.0	23	29.5	47	44.8	27	67.5	20	30.8
合計	125	100.0	47	100.0	78	100.0	105	100.0	40	100.0	65	100.0

#### 3) 分析の方法

第一に、入学動機については、浦上ら（2019）において作成された入学動機項目（仮説的入学動機要素項目：7次元33項目）を用いて測定した。具体的には、自分の興味関心や教養を身につけることを志向する「得意分野・自己形成」動機（4項目）、大学生活を楽しむことを志向する「エンジョイ・自己形成」動機（5項目）、特に目的や動機がない「無目的」動機（6項目）、学歴等が含まれる「社会的地位」動機（7項目）、就職したい職業に関係する資格免許や専門性に関わる「資格・専門」動機（3項目）、自分自身の学力に関わる「偏差値との適合」動機（3項目）、そして、本学部の特徴である医学部との連携や地域に根差した教育に魅力を感じているというような「本学の独自性」動機（5項目）に関する項目を設定した（表2）。また、各項目は、「1.全くそう思わない」、「2.そう思わない」、「3.どちらでもない」、「4.そう思う」、「5.とてもそう思う」といったリッカート型5段階尺度評定を用いて測定し、その数量化にあたってはそれぞれ1～5までの得点

を与え、その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で、各インディケーターの平均値等を算出することで各種分析を進めることとした。さらに、仮説的入学動機要素項目（7次元33項目）に対して1期生、2期生、3期生、4期生といった各期生での因子分析（4回の因子分析）を施し入学動機要素（因子）を明らかにするとともに、その各期生の因子からクラスター分析（4回のクラスター分析）を施すことで学生の類型化による各期生の特徴を明らかにした。このような分析手順で明らかとなった結果の比較により1～4期生の入学動機の差異を考察した。

表2 入学動機の測定項目（仮説的入学動機要素の項目：7次元33項目）

仮説的次元	項目
「得意分野・自己形成」動機	[Q28] 得意とすることを追求するため
	[Q29] 興味のある分野を深く掘り下げるため
	[Q15] 知的好奇心を満たすため
	[Q25] 自分の才能を伸ばすため
「エンジョイ・自己形成」動機	[Q33] 青春をエンジョイするため
	[Q22] 同じような目的を持った友人を得るため
	[Q5] 人生の視野を広げるため
	[Q27] 幅広い教養を身に付けるため
「無目的」動機	[Q7] 自分にあった職業を探すため
	[Q16] 両親が勧めるため
	[Q12] 親孝行のため
	[Q32] 特に目的はない
	[Q9] 周りのみんなが行くものだから
	[Q4] 自由な時間が欲しいため
「社会的地位」動機	[Q2] 他にやりたいことがないので
	[Q6] 社会に通用する肩書きが必要なため
	[Q24] 就職後、より高い役職に就くため
	[Q1] 就職後、多くの収入・給与を得るため
	[Q8] 高い社会的地位を得るため
	[Q19] 就職に有利なため
	[Q10] 大卒の肩書きがほしいため
[Q21] 高卒では嫌だから	
「資格・専門」動機	[Q13] 資格を取るため
	[Q23] 進学しないと希望の職業の資格が取れないため
	[Q30] 専門的な知識や技術を身に付けるため
「偏差値との適合」動機	[Q18] 自分の学力を考慮したため
	[Q11] 入試の難易度を考慮したため
	[Q31] 自分の成績にあっていたため
「本学の独自性」動機	[Q3] 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため
	[Q17] 医学部があり、医学的な知識も学べるため
	[Q20] 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため
	[Q26] 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため
	[Q14] 大学の設備が充実していたため

†；項目前の〔Q番号〕は問番号

第二に、1期生の学びの実感については、行實ら（2019）において作成された「学生生活の充実度」（9項目）および「入学後の実感」（22項目）を用いて測定した。具体的には、前者の学生生活の充実度の項目では授業、友人・教員との関係、課外活動、学外活動に関する項目を設定し（表3）、

後者の入学後の実感では先に示した入学動機項目（33項目）の中から期待内容に関連する項目を精選し、そのワーディングの末尾を「～できそうだ、～できている」といった表現を用いた22項目を作成した（表4）。また、各項目は、「1. 全くそう思わない」、「2. そう思わない」、「3. どちらでもない」、「4. そう思う」、「5. とてもそう思う」といったリッカート型5段階尺度評定を用いて測定し、その数量化にあたってはそれぞれ1～5までの得点を与え、その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で、各インディケータの平均値等を1期生の各年次で算出することとした。このような分析手順で明らかとなった結果の比較により1～4年次の学びの変遷を考察した。

表3 学生生活の充実度

項目
1. 授業
2. 友人との関係
3. 教員との関係
4. 大学で企画された課外活動
5. 部活動またはサークル活動
6. アルバイト
7. 学内でお知らせのあったボランティア活動
8. 個人的に参加したボランティア活動
9. 趣味活動

表4 学びの実感項目

項目
[q1] 自分の才能を伸ばすことができている
[q2] 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている
[q3] 専門的な知識や技術を身につけられている
[q4] 授業を通じて、これから専門的知識を学ぶにあたり、その基礎となる部分を構築しているという実感がある
[q5] 知的好奇心が満たされている
[q6] 高い社会的地位を得ることができそうだ
[q7] 同じような目的を持った友人を得ることができている
[q8] 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている
[q9] 本学部に入學してよかったと感じている
[q10] 就職に有利になりそうだ
[q11] 人生の視野を広げられている
[q12] 自分に合った職業を見つけられそうだ
[q13] 幅広い教養を身につけられている
[q14] 医学部があり、医学的な知識も学べている
[q15] 社会に通用する肩書きが得られそうだ
[q16] 青春をエンジョイできている
[q17] 就職後、より高い役職に就くことができそうだ
[q18] 興味のある分野を深く掘り下げられている
[q19] 希望している資格がとれそうだ
[q20] 得意とすることを追求できている
[q21] 就職後、多くの収入・給与を得ることができそうだ
[q22] 地域に根差した教育に魅力を感じている

## 4. 結果と考察

### 1) 1～4期生における入学動機の差異

表5は、浦上ら(2019)による仮説的入学動機要素項目(7次元33項目)に対して1期生, 2期生, 3期生, 4期生といった各期生での因子分析(4回の因子分析)を施し, その入学動機要素(因子)を明らかにするとともに, その各期生の因子からクラスター分析(つまり, 4回のクラスター分析)を施し学生の類型化による各期生の特徴を示したものである。ちなみに, 仮説的入学動機要素項目は, ①探索的因子分析(1回目:最尤法[回転なし], 2回目以降:最尤法[斜交回転プロマックス法])において因子負荷量が.35以下の項目および複数の因子に高い因子負荷量を持つ項目の削除, ②主成分分析(各因子を構成する項目間の分析において第一主成分のみが抽出されるのかを確認), ③信頼性分析( $\alpha$ 係数が.60以上を確認)を施すことで, 抽出された因子の信頼性・妥当性を検証している。また, 入学動機の各因子をZ得点に換算し, クラスター分析(word法)を施すことで各期生の類型化を行った。

これらの各種分析を施した結果, 第一に, 1期生の入学動機は, 最終的に4因子24項目を採用した。具体的には, 「F1.資格・専門性」(4項目), 「F2.内的期待」(9項目), 「F3.外的期待」(6項目), 「F4.無目的」(5項目)といった4つの動機を抽出(命名)した。また, これらの入学動機因子により「G1.無目的」, 「G2.専門性高」, 「G3.期待高」, 「G4.未決定」といった学生の類型化を施し1期生の特徴を提示した。

第二に, 2期生の入学動機は, 各種分析を施し最終的に4因子22項目を採用した。具体的には, 「F1.資格」(3項目), 「F2.専門性」(5項目), 「F3.大学の独自性」(5項目), 「F4.外的期待」(9項目)といった4つの動機を抽出(命名)した。また, これらの入学動機因子により「G1.入学期待高」, 「G2.資格期待低」, 「G3.内発的期待高」, 「G4.入学期待低」といった学生の類型化を施し2期生の特徴を明らかにした。

第三に, 3期生の入学動機は, 各種分析を施し最終的に4因子28項目を採用した。具体的には, 「F1.資格取得」(5項目), 「F2.大学特性による自己形成」(11項目), 「F3.就活成就」(9項目), 「F4.偏差値との適合」(3項目)といった4つの動機を抽出(命名)した。また, これらの入学動機因子により「G1.期待高位」, 「G2.入学満足」, 「G3.偏差値との適合」, 「G4.資格取得」といった学生の類型化を施し3期生の特徴を提示した。

第四に, 4期生の入学動機は, 各種分析を施し最終的に4因子28項目を採用した。具体的には, 「F1.資格取得」(5項目), 「F2.大学特性による自己形成」(11項目), 「F3.偏差値との適合」(3項目), 「F4.就活成就」(9項目)といった4つの動機を抽出(命名)した。また, これらの入学動機因子により「G1.入学満足」, 「G2.偏差値との適合」, 「G3.資格取得」, 「G4.期待低位」といった学生の類型化を施し4期生の特徴を明らかにした。

最後に, 1～4期生の入学動機は, 各期において特異な入学動機要素(1期生「無目的」要素, 2期生「大学の独自性」要素, 3期生と4期生「偏差値との適合」要素)が確認できた一方で, 1～4期生に共通した入学動機要素(「資格取得」要素)が存在することが明らかとなった。また, 1～4期生のクラスター分析による類型化は, 最も大きいクラスターが1期生「無目的」, 2期生「入学期待高」, 3期生「期待高位」, 4期生「入学満足」といった特徴を持つ学生であった。

以上のことから, 1～4期生の入学動機の差異からみる新学部学生の特徴としては, ①「各期生

共通して資格取得を希望していること], ②「2期生以降は大学独自の教育に期待が向けられていること」, ③「3期生以降は大学独自の教育への期待とともに偏差値との適合が主な入学動機であること」, などが示唆される。

表5 入学期別および学科別にみる入学動機因子とその因子によるクラスター群

		1期生 (2017年度入学)					
入学 動機 因子	因子	全体		子ども学科		スポーツ学科	
		M	SD	M	SD	M	SD
入学 動機 因子	F1. 資格・専門性	4.26	0.63	4.35	0.66	4.20	0.61
	F2. 内的期待	3.48	0.84	3.59	1.00	3.41	0.72
	F3. 外的期待	2.90	0.90	2.98	0.90	2.85	0.89
	F4. 無目的	2.47	0.78	2.51	0.73	2.45	0.81
ク ラ ス タ ー 群	クラスター	N	%	N	%	N	%
	G1. 無目的	66	52.0	20	40.8	46	59.0
	G2. 専門性高	29	22.8	12	24.5	17	21.8
	G3. 期待高	18	14.2	12	24.5	6	7.7
	G4. 未決定	14	11.0	5	10.2	9	11.5
† 全体 n=127 子ども学科 n=49 スポーツ学科 n=78							
		2期生 (2018年度入学)					
入学 動機 因子	因子	全体		子ども学科		スポーツ学科	
		M	SD	M	SD	M	SD
入学 動機 因子	F1. 資格	4.09	0.87	4.20	0.67	4.01	0.98
	F2. 専門性	3.74	0.90	3.64	0.82	3.81	0.95
	F3. 大学の独自性	3.30	0.99	3.44	1.03	3.21	0.97
	F4. 外的期待	2.72	0.76	2.80	0.86	2.66	0.69
ク ラ ス タ ー 群	クラスター	N	%	N	%	N	%
	G1. 入学期待高	82	64.1	37	69.8	45	60.0
	G2. 資格期待低	18	14.1	5	9.4	13	17.3
	G3. 内発的期待高	17	13.3	6	11.3	11	14.7
	G4. 入学期待低	11	8.6	5	9.4	6	8.0
† 全体 n=128 子ども学科 n=53 スポーツ学科 n=75							
		3期生 (2019年度入学)					
入学 動機 因子	因子	全体		子ども学科		スポーツ学科	
		M	SD	M	SD	M	SD
入学 動機 因子	F1. 資格取得	4.17	0.63	4.10	0.61	4.21	0.64
	F2. 大学特性による 自己形成	3.28	0.71	3.45	0.75	3.17	0.68
	F3. 就活成就	2.96	0.80	2.93	0.78	2.98	0.82
	F4. 偏差値との適合	2.91	1.02	2.89	1.03	2.91	1.02
ク ラ ス タ ー 群	クラスター	N	%	N	%	N	%
	G1. 期待高位	38	34.5	14	35.9	24	33.8
	G2. 入学満足	29	26.4	11	28.2	18	25.4
	G3. 偏差値との適合	22	20.0	7	17.9	15	21.1
	G4. 資格取得	21	19.1	7	17.9	14	19.7
† 全体 n=110 子ども学科 n=39 スポーツ学科 n=71							

4期生（2020年度入学）							
入学動機因子	因子	全体		子ども学科		スポーツ学科	
		M	SD	M	SD	M	SD
因子	F1. 資格取得	3.89	0.82	4.05	1.28	3.74	1.03
	F2. 大学特性による自己形成	3.86	0.65	3.91	1.02	3.82	0.82
	F3. 偏差値との適合	2.79	0.94	2.80	1.46	2.77	1.18
	F4. 就活成就	2.62	0.69	2.54	1.07	2.70	0.86
クラスター群	クラスター	N	%	N	%	N	%
	G1. 入学満足	34	36.2	16	43.2	18	31.6
	G2. 偏差値との適合	23	24.5	7	18.9	16	28.1
	G3. 資格取得	20	21.3	9	24.3	11	19.3
	G4. 期待低位	17	18.1	5	13.5	12	21.1

† 全体 n=94 子ども学科 n=37 スポーツ学科 n=57

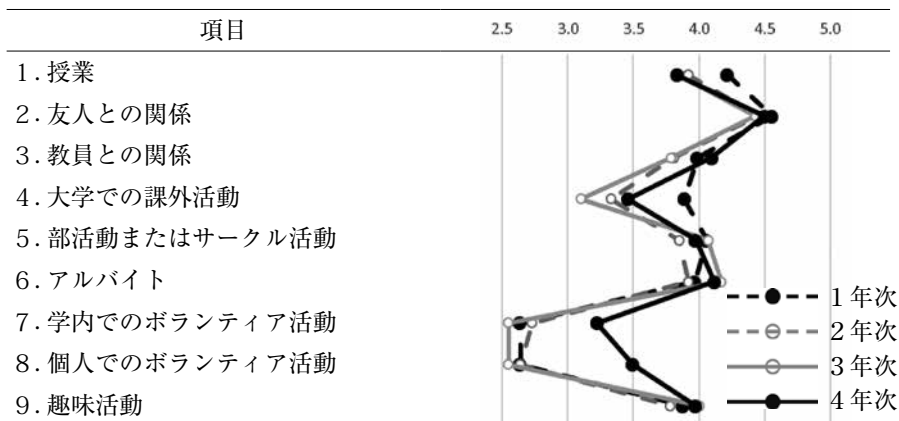
## 2) 1期生の学びの実感の変遷

図1および図2は、行實ら（2019）において作成された「学生生活の充実度」（9項目）を用いて、1期生の1年次～4年次における学生生活充実度を示したものである。

第一に、学部全体（図1）では、4年次において充実度が最も高い項目が、「2. 友人との関係」、「3. 教員との関係」、「6. アルバイト」、「7. 学内でのボランティア活動」、「8. 個人でのボランティア活動」、「9. 趣味活動」といった6項目で確認できる。一方、「1. 授業」の充実度は4年次に最も低い傾向であることが確認できる。

第二に、学科別（図2）では、4年時において充実度が最も高い項目が、総合子ども学科で「7. 学内でのボランティア活動」、「8. 個人でのボランティア活動」、「9. 趣味活動」の3項目で確認できるのに対して、スポーツ医科学科で「2. 友人との関係」、「3. 教員との関係」、「6. アルバイト」、「7. 学内でのボランティア活動」、「8. 個人でのボランティア活動」の5項目を確認することができる。一方、総合子ども学科で「2. 友人との関係」、スポーツ医科学科で「1. 授業」の充実度が4年時に最も低い傾向になっていることが確認できる。

図1 1期生の学生生活充実度の変遷



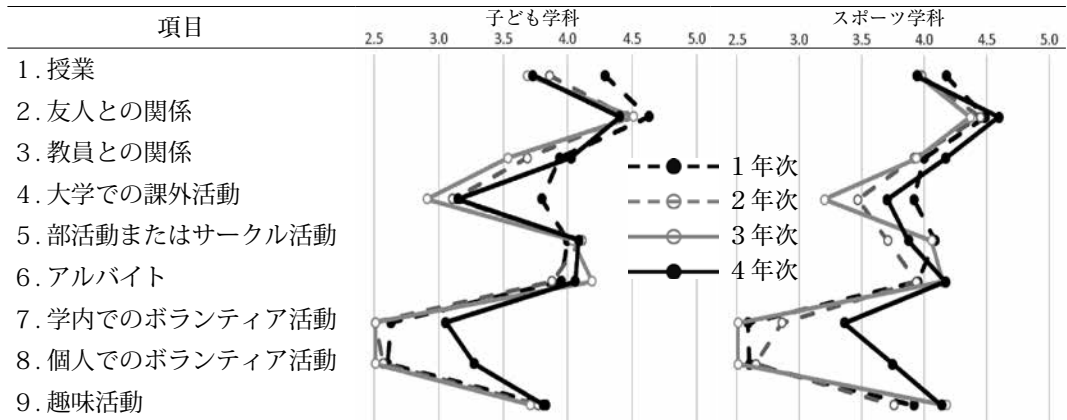
† 項目内容は省略して端的に示している

†† 項目5～8は「活動なし」の回答者を除いたポイントを示している

††† n=86



図2 1期生の学生生活充実度の変遷（学科別）



† 項目内容は省略して端的に示している

†† 項目5~8は「活動なし」の回答者を除いたポイントを示している

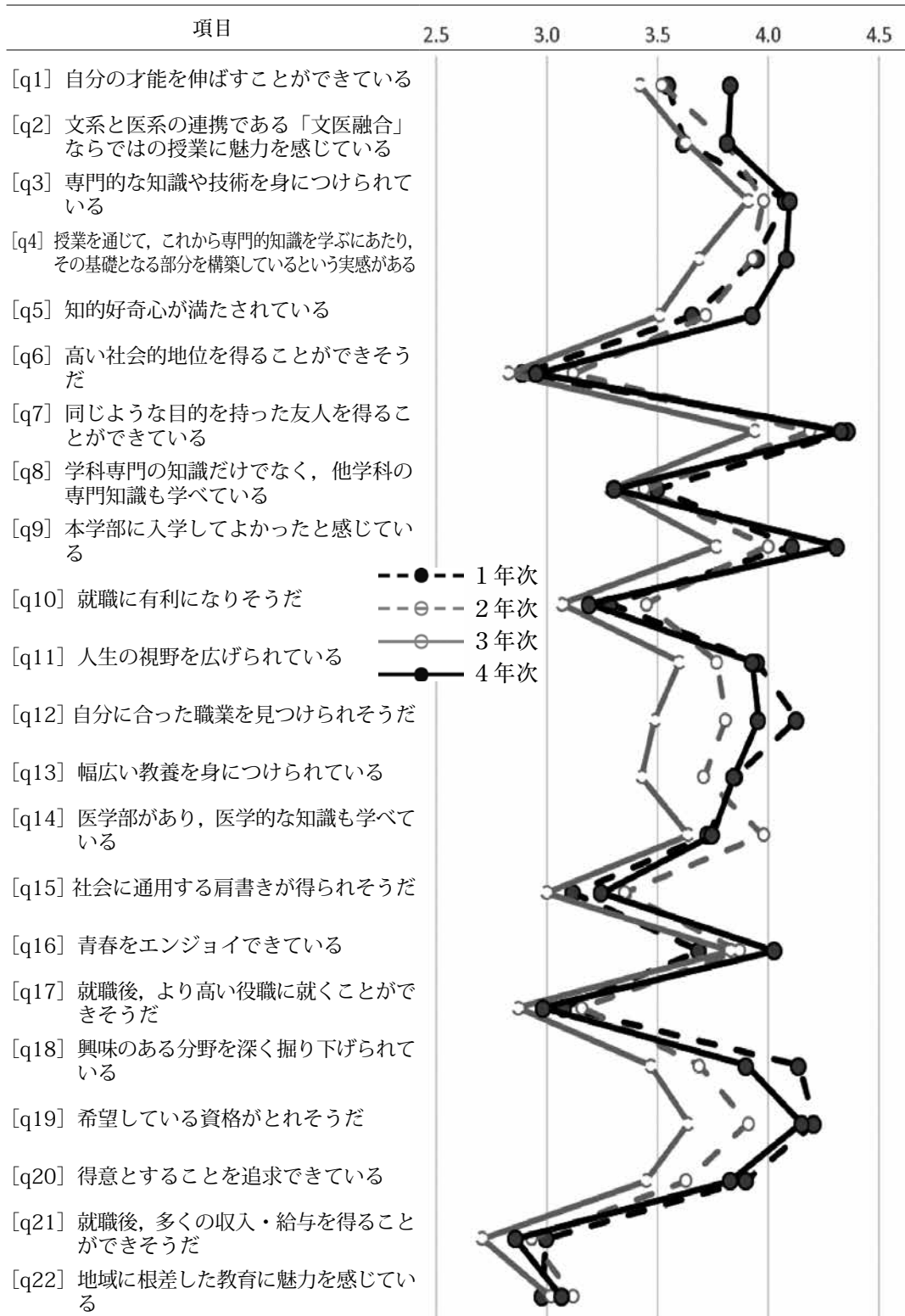
††† 子ども学科 n=35, スポーツ学科 n=49

翻って、図3および図4は、行實ら(2019)において作成された「入学後の実感」(22項目)を用いて、1期生の1年次~4年次における学びの実感を示したものである。

第一に、学部全体(図3)では、4年次において学びの実感が最も高い項目として「[q1]自分の才能を伸ばすことができている」、「[q2]文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」、「[q3]専門的な知識や技術を身につけられている」、「[q4]授業を通じて、これから専門的な知識を学ぶにあたり、その基礎となる部分を構築しているという実感がある」、「[q5]知的な好奇心が満たされている」、「[q7]同じような目的を持った友人を得ることができている」、「[q9]本学部に入學してよかったと感じている」、「[q16]青春をエンジョイできている」といった8項目を確認できる。また、1年次~3年次と学年が上がるにつれて学びの実感が低くなっていった項目が4年次において1年次のポイントまで高まる項目が多くみられ、その中でも、「[q11]人生の視野を広げられている」、「[q12]自分に合った職業を見つけられそうだ」、「[q13]幅広い教養を身につけられている」、「[q14]医学部があり、医学的な知識も学べている」、「[q18]興味のある分野を深く掘り下げられている」、「[q19]希望している資格がとれそうだ」、「[q20]得意とすることを追求できている」といった7項目はポイントを大きく回復していることが確認できる。

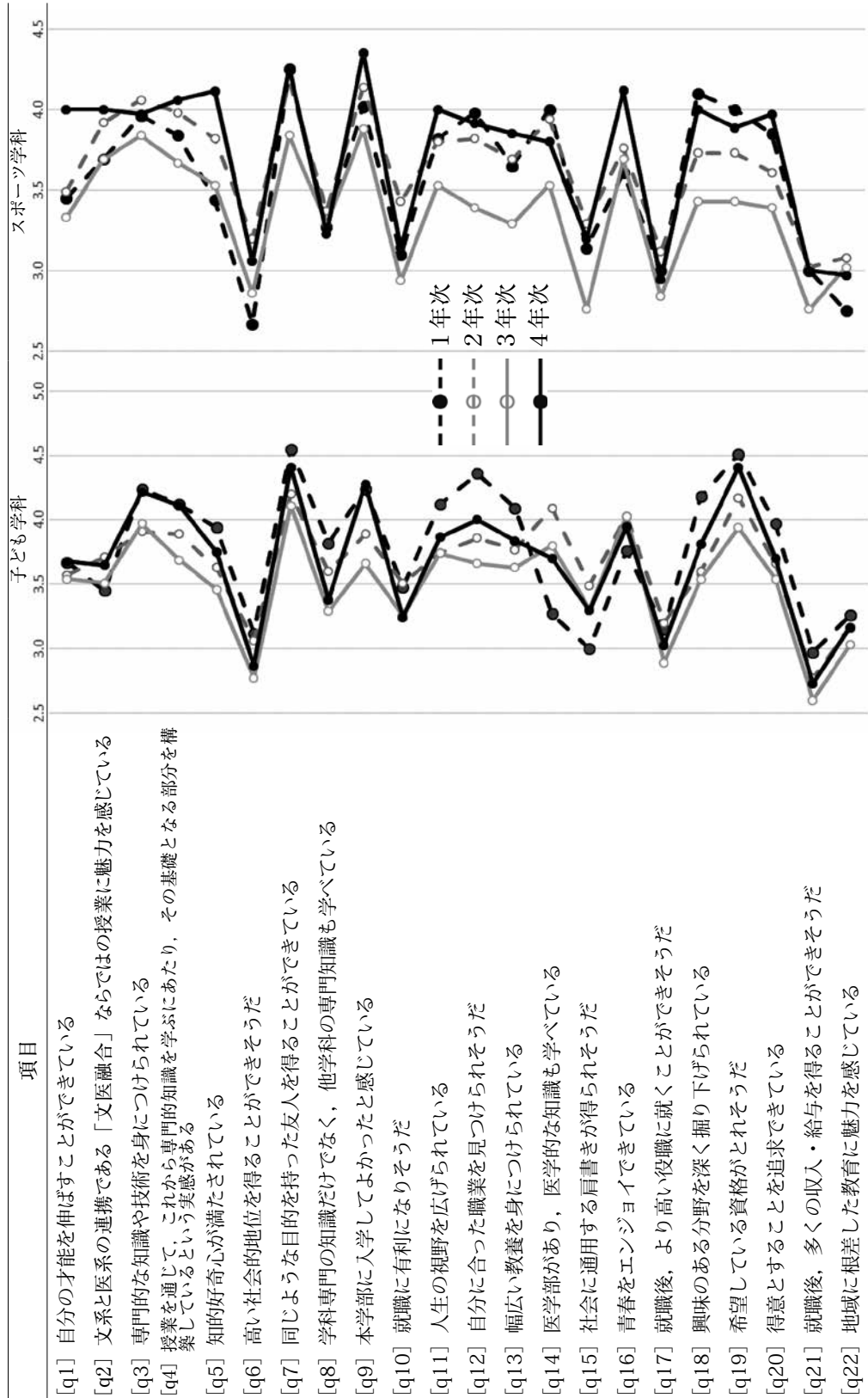
第二に、学科別(図4)では、4年時において学びの実感が最も高い項目として、総合子ども学科で「[q1]自分の才能を伸ばすことができている」、「[q3]専門的な知識や技術を身につけられている」、「[q4]授業を通じて、これから専門的な知識を学ぶにあたり、その基礎となる部分を構築しているという実感がある」、「[q9]本学部に入學してよかったと感じている」といった4項目を確認することができるのに対して、スポーツ医科学科で「[q1]自分の才能を伸ばすことができている」、「[q2]文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」、「[q4]授業を通じて、これから専門的な知識を学ぶにあたり、その基礎となる部分を構築しているという実感がある」、「[q5]知的な好奇心が満たされている」、「[q7]同じような目的を持った友人を得ることができている」、「[q9]本学部に入學してよかったと感じている」、「[q11]人生の視野を広げられている」、「[q13]幅広い教養を身につけられている」、「[q16]青春をエンジョイできている」、「[q20]得意とすることを追求できている」といった10項目を確認できる。

図3 1期生の学びの実感の変遷



† n=86

図 4 1 期生の学びの実感の変遷 (学科別)



\* 子ども学科 n=35, スポーツ学科 n=49

以上のように、1期生の学生生活の充実度や学びの実感の変遷は、1～3学年と年次が上がるにつれて多くの項目でポイントを下げると同時に、4年次に多くの項目でポイントが上がる（回復させる）傾向を確認できた。また、その傾向は、スポーツ医科学科において顕著であったといえよう。

## 5. 今後の課題

本研究では、1～4期生における入学動機の差異を把握するとともに、1期生の学生生活の充実度と学びの実感の変遷（4年間）を確認してきた。これらの結果を踏まえ、最後に本学部が目指す「文医融合」教育の課題を提示したい。

第一に、両学科において取得できる資格教育の充実が挙げられる。本学部は「文医融合」という学部コンセプトを掲げ、文系学部でありながら医学部との連携・協働した資格教育カリキュラムを展開している。この資格教育に対する学生の期待は、入学動機要素の特徴（「資格取得」動機が1期生～4期生の共通した入学動機要素であったこと）からも大きいことがうかがえよう。しかしながら、学生生活における「授業」の充実度や、学びの実感における1年次から3年次までの専門性や資格に関する項目（[q3]、[q4]、[q19]）でポイントの低下がみられた。このことから、基礎科目から応用科目に至る過程において専門性の習得を実感できるカリキュラムの順序性（スコープやシークエンス）を検討していくことは喫緊の課題であるといえよう。

第二に、多様な学習機会（大学内外の教育活動）の創出が挙げられる。久留米大学の基本理念「人間性豊かな実践的人材の育成」に基づき、新学部（人間健康学部）では、「乳幼児から高齢者まで生涯を通じた健康づくりに貢献できる人材の育成」を教育理念として掲げている。今回、学生生活における「学内でのボランティア活動」や「個人でのボランティア活動」の充実度が1年次～4年次にかけてポイントの上昇がみられることは、学部学生たちが大学内外での活動を上げていったと評価することができる。このことから、大学内外のフィールドを活用した教育活動（実習やインターンシップ、ボランティア活動など）の充実が、新学部の教育理念に則した取り組みとして重要視しなければならないといえよう。

最後に、教員と学生との質の高い関係の構築が挙げられる。今回の入学動機の差異で3期生以降にみられる「偏差値との適合」動機は、自分の学力で入学可能であったから希望したという学生の動機であり、いうなれば、本学が第一希望ではなかった学生が入学していることがうかがえる。しかしながら、1期生における学生生活の「友人との関係」や「教員との関係」や学びの実感の多くの項目で4年次のポイントが高い（回復している）項目が多い事を勘案すれば、カリキュラムや指導方針により、学生生活を充実したものにつなげる可能性もあると考えられる。よって、教員と学生、学生同士の関係性の質的向上を意識する必要があるといえよう。特に、学生の修学に対する戸惑いに対して、教員が真摯に向き合う姿勢は、今後一層求められるのかもしれない。

以上のように、本学部における「文医融合」教育の課題を指摘できるが、学生生活における充実度および学びの実感に関する変遷、いうなれば、新学部学生の学びの成果は、1期生の実態に基づき考察をおこなった。ゆえに、入学動機が異なる学生達（2期生～4期生）の学びの実感を把握することは、上記に指摘した課題の妥当性・信頼性を高めるためにも今後必要な作業になるといえよう。

## 注

1. 入学動機のデータは、1期生～3期生が対面調査で4期生がweb調査で実施・回収したデータを使用している。また、学びの実感（1期生）のデータは、1年次～3年次が対面調査で4年次がweb調査で実施・回収したデータを使用している。

## 引用文献

- 浦上 萌・奥野真由・行實鉄平・野田 耕・秦 佳江・大橋充典 (2019) 大学進学動機と学部の独自性との関連：文医融合学部に所属する大学生に着目して. 久留米大学人間健康学部紀要, 1:1-10.
- 行實鉄平・浦上 萌・奥野真由・大橋充典・野田 耕・秦 佳江 (2019) 学生による新設学部への期待と実感：Importance-Performance Analysis を用いて. 久留米大学人間健康学部紀要, 1:27-39.
- 行實鉄平・浦上 萌・奥野真由・大橋充典・野田 耕・秦 佳江 (2020) 人間健康学部の特徴に対する学生の期待と実感：1期生と2期生における比較. 久留米大学人間健康学部紀要, 2:35-51.

## 付記

本研究は、令和2（2020）年度久留米大学副学長裁量研究教育支援「人間健康学部における教育評価および新規科目の開発」の調査結果の一部を用いて実施されたものである。また、「学部教育研究プロジェクト」のメンバー（鍋谷 照，野田 耕，大橋充典，秦 佳江，奥野真由）の先生方には、本調査の実施にあたり、多大なるご協力をいただいた。

(2020.12.31. 受付 2021.2.24. 受理)